

気仙沼（唐桑地区）ボランティアプロジェクト第8クール 明治学院大学活動報告

※この報告書は明治学院大学メンバーが関わった活動内容を中心に記載しています。
第8クールの活動内容全てが記されている報告ではありませんので、ご了承ください。

【概要】

- 日 程：2011年9月2日(金)～9日(金)（2日及び8日は夜行バスにて車中泊）
- 参加人数：明治学院大学 学生7名、引率2名（9月5日朝帰京）

第8クール参加大学

桜美林大学、関西学院大学、西南学院大学、東北学院大学、立命館大学、
名古屋学院大学、明治学院大学、麗澤大学

【活動スケジュール】

- － 9月2日(金) 天候：曇り、強風 －
 - 22:30 東京駅丸の内中央口 東京海上日動ビル前 集合
 - 22:50 出発
- － 9月3日(土) 天候：曇りときどき雨 －
 - 5:15 仙台駅西口 到着
 - 西口マクドナルドにて朝食。
 - 6:35 地下鉄 乗車
 - 乗車前に簡単な顔合わせ。
 - 6:50 東北学院大学 到着
 - 備品確認。バスに荷物積み込み。
 - 8:00 唐桑体育館に向け出発
 - 途中、気仙沼の被災された場所を見学させていただきました。
 - 11:50 唐桑体育館 到着
 - 荷物運び。
 - ～昼食～
 - 『体育館内のカップ麺』

- 13:00 作業開始 ※以下、参加作業の種類と明学メンバーからの派遣人数を示します
・写真洗浄、アルバムのデータ化（13:00～16:00）2名
- 13:30 掃除・畳敷き・荷物整理
- 15:00 空き時間
シャワー、体育館周辺を散策など各自自由行動。
- 18:30 夕食
『気仙沼ホルモン丼、とき卵のスープ、現地名産「ユウガオ」入り煮付け』
夕食前には議員の方（すみません、名前は失念してしまいました）からの話も聞きました。
- 20:15 全体ミーティング
自己紹介、明日の確認等。
「本当の豊さとは」という問題提起もありました。
- 22:15 大学別ミーティング
今日の感想、明日の作業決め等。
- 23:00 消灯

— 9月4日(日) 天候：曇りのち晴れ —

- 7:00 起床・朝食『おにぎり』
- 9:00 作業開始 ※作業種類と派遣人数
・鮎立地区の瓦礫撤去（9:00～15:00）2人
・写真洗浄、アルバムのデータ化（9:00～16:00）2人
・一般民家の草刈り（9:00～16:00）2人
・生活支援班（15:00～）1人
※昼食は各自調達
- 18:10 夕食
『カレー、サラダ、スイカ』
- 20:30 全体ミーティング
今日の作業班に分かれて振り返り、明日の参加作業決め。
- 22:30 学校別ミーティング
今日の感想、明日の行動予定確認。
- 23:00 就寝

— 9月5日(月) 天候：曇り時々雨 —

- 7:00 起床・朝食『おにぎり』
- 9:00 作業開始 ※作業種類と派遣人数
・漁師さんとアンカー作り（9:00～14:00）3人

- ・リアスアーク美術館での作業（9:00～17:00）2人
- ・写真洗浄、アルバムのデータ化（9:00～16:00）2人
- ・生活支援班（15:30～）1人

※昼食は各自調達

18:00 夕食

『ご飯、豚汁、刺身（イナダ、カツオ）、スイカ』

19:30 FIWCメンバーとの懇親会（参加希望者のみ）

明治学院大学メンバーから3人参加。

20:30 全体ミーティング

今日の作業班に分かれて振り返り、明日の参加作業決め。

22:20 学校別ミーティング

今日の感想、明日の行動予定確認。

23:00 就寝

— 9月6日(火) 天候：晴れ時々曇り —

7:00 起床・朝食『おにぎり』

9:00 作業開始 ※作業種類と派遣人数

- ・鮎立地区の清掃活動（9:00～15:00）2人
- ・リアスアーク美術館での作業（9:00～17:00）2人
- ・写真洗浄、アルバムのデータ化（9:00～16:00）2人
- ・生活支援班（15:30～）2人

※昼食は各自調達

18:00 夕食

『ご飯、豚汁、煮付け（イナダ、アラ）、キャベツ・キュウリ・トマトの和え物』

20:00 FIWCメンバー・唐桑ボランティア団事務局を勤める加藤さんの話

21:50 学校別ミーティング

加藤さんの話の感想、今日の活動報告、明日の行動予定確認など。

23:00過ぎ 就寝

— 9月7日(水) 天候：晴れ —

7:00 起床・朝食『おにぎり』

9:00 作業開始 ※作業種類と派遣人数

- ・鮎立地区の砂浜清掃活動（9:00～15:00）4人
- ・リアスアーク美術館での作業（9:00～17:00）2人
- ・写真洗浄、アルバムのデータ化（9:00～16:00）1人

※昼食は各自調達

- 15:30～ 小学生と一緒に遊ぶ
近くの唐桑小学校校庭でたまたま遊んでいた小学生と飛び入りで一緒に遊ばせてもらいました。
- 18:10 夕食
『パン、ホワイトシチュー、オレンジ』
- 20:30 全体ミーティング
今日の振り返り、明日の作業の割り振り。
- 21:30 学校別ミーティング
今日の活動報告、これまで活動してみたの感想
次回以降のクールの人たちに伝えたいこと
気仙沼プロジェクトに参加してみて自分がどう変わったか等を話し合いました。
- 22:00 参加希望者のみ早馬神社見学
- 24:00 地元漁師の方からの話
- ??? 各自就寝

— 9月8日(木) 天候：晴れ —

- 7:00 起床・朝食『おにぎり』
- 9:00 作業開始 ※作業種類と派遣人数
- ・ウラ地区での草刈り (9:00～12:00) 4人
 - ・リアスアーク美術館での作業 (9:00～12:30) 2人
 - ・写真洗浄、アルバムのデータ化 (9:00～12:00) 1人
- 12:30 昼食
『生姜焼き丼』
- 13:00 清掃、帰宅準備
- 15:30 全員で記念撮影
- 16:00 唐桑体育館 出発
- 18:50 東北学院大学 到着
- 21:00 懇親会
- 23:50 仙台駅 出発

— 9月9日(金) 天候：晴れ —

- 5:00 新宿駅 到着
- 5:30 東京駅 到着

※今クール期間、東北学院大学教員である宮本先生の計らいにより時間が空いている者から順々に陸前高田市を見学させてもらいました。

【引き継ぎ事項・良かった点・改善点】

○活動面

※具体的な活動内容は前クールまでの報告書等に記載されているので、そちらをご参照ください。また今までの報告書と重複する事項も割愛し、特記したいことを選択して記載致します。

《リアスアーク美術館での作業》

- ・メンバー同士や美術館の方と、もっと始めから積極的にコミュニケーションをとりたかったです。
- ・単純作業もあり眠くなってしまう時があった。気を引き締めたい。
- ・一緒に作業していた方にマッサージをしてあげて更に仲良くなりました。
- ・最終日の別れ際に手紙を渡し、皆が号泣してしまい、別れが名残惜しかったです。
- ・リアスアーク美術館で働いている方々も被災されていたので言葉には気を付けた。美術館の方々はとても明るく優しくかった。色々なお話をしてくれたが、震災によってたくさんの辛い思いをされたのだろうと思うと本当に胸が痛んだが、何も言葉をかけることができなかった。活動の最終日に一人一人が私たちに言葉をかけてくれた。その言葉が優しく、リアスの方々に出会えて本当に良かった。
- ・活動最終日に「がんばろう気仙沼」のTシャツを着て作業したら喜んでくれた。

《一般住宅の草刈り》

- ・ひたすら草刈りなので水分は沢山用意すること。
- ・装備は動きやすいスニーカー、軍手（ゴム付きなら尚良い）、長袖長ズボン、帽子等。
- ・雑草は鎌を使って切るか手で抜くかでした。
- ・依頼者一家はとても良い方でした。お子さんと喋って楽しかったです。
- ・瓦礫撤去などに手いっぱい、草刈りまで手が回らないためボランティアに頼んだそう、津波の直接の被害ではないとしても、そういうお手伝いの仕方もあるのだと学んだ。被災された方々が元気になってもらえることが一番重要であり、そのためのボランティアなのだ分かった。
- ・FIWCと一緒に活動して、活動のメリハリを学んだ。休憩中は楽しく、作業中は真面目に。また、ただの作業をするボランティアではなく、つながりを大事にしてやっていきたいという姿勢で、民家の家主さんに「また何かあったら、すぐには無理かもしれませんが、来るので連絡してくださいね」とおっしゃっていたのを聞き、誠実さを感じた。
- ・大人数で行ったため、作業前とは見違えるほど地面が見えるようになり、達成感があった。

《写真洗浄、アルバムのデータ化》

- ・丁寧さ、根気さが要求される仕事で、また体育館には地元の方たちが写真を探しにいらしているので、静かに裏方に徹して活動することが重要である。
- ・活動終了後に手洗いとうがいをすること。
- ・洗浄の際に自分のサイズに合うゴム手袋が必要。
- ・アルバムの写真に触る時も手袋をした方がよい。
- ・外国人の方とのコミュニケーションが楽しかったです。
- ・写真洗浄は汚れを落とすのを諦めるのか諦めないかの判断が難しいと感じました。
- ・写真を見に来ていた方を見て、より一層丁寧に、より多くの写真を返すお手伝いをしたいと思いました。
- ・「他のと別にしておいて下さい」と頼まれた写真を他のものと混ぜてしまったので、気を付けて作業をしたい。
- ・作業に慣れてしまい、逆に“大切な思い出の品”という認識が薄れてしまった。
- ・後片付けをさせてもらう日もあった（トレーを洗う、掃き掃除等）。
- ・疲れないよう日なたを避けて作業をする工夫をした。
- ・洗浄の際に顔の部分も一緒になくなってしまう写真の扱いが難しかった。
- ・責任者の高井さんは、ご自分も被災され、被害を受けた農業も再開したいと思いつつ、今は写真を頑張っているということを壁に貼ってあった記事で読んだ。ご自分のこともあるのに、半年経ってもまだまだ作業が終わらない写真の山を、ボランティアに優しく笑顔で指導しながら、きれいにデータ化していく高井さんは尊敬に値する人物だと思った。

《瓦礫撤去、草刈り、清掃作業》

- ・新しい作業に行く場合は、何が必要か運営側もわからないことがある。とりあえず装備一式（ヘルメット、ゴーグル、マスク、ゴム手袋、軍手、鉄板入り長靴、長袖長ズボン）で向かう。
- ・軍手だけではガラス等が刺さる恐れがあるので、軍手の上にゴム手袋を装着するとよい。
- ・汗を大量にかくので水分は1~2リットルは必要。
- ・疲れてくるとダラダラとした態度になりがちになってしまうが、ボランティアをやらせてもらっている立場を忘れずに行動は常にキビキビと。
- ・他団体と一緒に活動することが多いので積極的にコミュニケーションをとると良い。
- ・判断に迷ったら自身で決めずに必ず人に聞くこと。
- ・屋外作業では服の前後に名前を書いたガムテープを貼り付けること。学生同士だけではなく、一緒に作業をする他の団体の方や現地の人にも名前を認識してもらえらるため。

- ・波で打ちあがった瓦礫やごみの撤去、清掃をした。女子はひたすら小さい瓦礫やごみを拾う作業で、終わりが見えず途中でやる気を失ったりもした。しかし、RQ災害支援センターにボランティアに来ていた助産師さんとお話をし、犬の人形などの切ない漂流物を見るにつれ、できるだけきれいな海岸にしたいという気持ちを持ち直すことができた。また聞いた話ですが、この海の景色を「きれいですね」と学生ボランティアが言ったところ、実は今の景色は地盤が沈下して、震災以前とは全く違ったものになっており、地元の方からするときれいと言えるものではないということを知り、被災された方とお話する際には、そういうところまで考えなければいけないと感じた。

《アンカー作り》

- ・40キロ程の土嚢袋を運ぶ作業なので腰をやられやすいため注意が必要。
- ・軽作業は女子でもやり易くて良かった。

《小学生との遊び》

- ・現地の小学生と楽しく遊べたことが良かった。
- ・学校や年齢の枠を超えて皆が笑顔で過ごすことができた。
- ・小学校の先生の許可は得て行ったが予定にはない活動だったので、トラブル回避のためにも事前に学生リーダーに相談して行った方がよいと感じた。

○生活面

《食事》

- ・調理は、自分は料理ができない方でとても心配だったが、皆と協力しあえば意外と50人分も問題なく作ることができた。大人数分作るためのいろんなアイデア出し（炊飯器を3回に分けて炊くため、炊けたら鍋に移して置いておくことや、炒め物の味付けがバラバラにならないよう、最後にまとめて大鍋で味付けするなど）は重要だったと思う。
- ・夕食は基本的には18:00からであるが、作業から帰るのが遅くなった者は夕食も遅くに食べる羽目になる。シャワーを浴びる時間も短くなるので注意が必要です。
- ・調理場の片付けは、特に担当を決めていなかったのが仕方ないかもしれないが、気づけば大体同じようなメンバーが行っていたような気がする。不公平にならないように、各自が積極的に手伝ったらよかった。

《シャワー》

- ・シャワーは夜でも他団体が使うことがある。シャワー待ちの列が長くなることもあります。

- ・シャンプー、リンス、ボディソープは自分できちんと用意した方が無難。備品もあるが、すぐなくなってしまう。また、ドライヤーは電気をくうため使わない雰囲気があるので、自然乾燥で。

《洗濯》

- ・洗濯物を干す、洗濯ばさみがたくさんついたハンガーがあると便利。女子は体育館内に、パーテーションで区切られて中が見えないようになっている洗濯物を干す用のスペースがある。しかし外に干している子もいた。
- ・洗濯物を誰がどのように行うかは各クールによってルールが違うかと思われる（全体でまとめて行う、学校毎に行う、個人で行う等）。全体ミーティングでルール作りをするとスムーズになるかもしれません。
- ・洗濯用のネットは、自分のものと他の人のものが混ざらない用に大きめのものがあるとよい。

《外出》

- ・体育館からシャワー室や夜間の買い物に行くのに、街灯がなく真っ暗なので、足元を照らすもの（小さい懐中電灯など）があると便利です。
- ・外出用のサンダルがあると楽に脱ぎ履きできます。
- ・夜に勝手に外を歩き回ることは控える。この地域では夜に人が外を歩いていることは普通なことではないため。自分たちが部外者であることを意識して行動すること。

《その他》

- ・体育館が埃っぽく、アレルギー症状が出たのか、朝起きるとくしゃみが出た。マスクをして寝ると改善される。
- ・首にかける名札は使わなかった。今回は桜美林大学の先生が全員分のバッジ名札を作ってくだった。
- ・最終日前日の生活支援班は、畳を天日干ししてくれた。
- ・ローソンで飲み物を買う場合は大きいサイズを買ったほうが、ちよくちよく小さいサイズを買うより安いし楽である。ただ冷蔵庫は個人で使えないので、3日目くらいから味に不安が生じるため注意。ペットボトルに直接口をつけて数日飲むより、水筒などに移して飲み続ける方がまだ衛生的かもしれない。
- ・生活全体を考えてみても、基本的に、皆自分のことは自分ででき、また仲間と協力し合える人が来ていたと思うので大きい問題はなかった。片付けや洗濯は忙しい人の分を誰かが代わりにやったり、順次交代していったり、臨機応変に対応することができていたと思う。
- ・体育館には枕があるが足りなくなるかもしれないので、余裕があれば簡単な枕にな

るものも持ってくると良いかもしれません。

- ・プロジェクトの作業内容は「参加のしおり」に書かれている内容のものがほとんどです。報告書や注意事項、過去のメーリングリストで流された情報を確認して、それを踏まえた準備をすることを勧めます。
- ・決められたルールや指示には必ず従うこと。勝手なことをして迷惑をかけない。
- ・近くのローソンは24時間営業で品数も多く非常に便利です。ただし、ATMはなく近場には郵貯しか無いそうです。お金をおろす場合は注意が必要です。
- ・現地に着いたら唐桑体育館近くにある観光スポットをチェックすると良いかもしれません。相馬神社、巨釜半造（おがまはんぞう）など。時間潰しも兼ねた観光にもなります。
- ・荷物はなるべくコンパクトに。荷物が大きいと持って移動するのに苦労したり、置く場所をとって邪魔になったりする恐れがあるため。
- ・リアスアーク美術館での作業は、千葉県佐倉市の国立歴史博物館に展示される物の泥落としや整理をしています。2013年度に展示されるということなので興味のある方は是非。

○明治学院大学としての面

- ・参加人数は第8クルールの9名程度が限度であると思われる。それ以上であるとメンバーがまとまるのに苦労する上、他大学とのパワーバランスに影響が出る恐れがある。
- ・他大学の学生と協同することは刺激にもなり非常に良かったです。
- ・活動費を学校側から援助してもらえたことは大変ありがたかったです。
- ・夜行バスでの移動は体力的、時間的な面からは問題なかったように思えます。
- ・バス出発の集合場所は連絡方法も含め事前に考慮しておく必要がある。
- ・ほとんどの大学は東北学院大に泊まって帰るのに、明治学院大学だけ（他も数校）夜行バスで先に帰るのが切なかった。
- ・ボランティアセンターから逐次メールや電話連絡があり、サポート体制がしっかりしていて安心感があった。
- ・大学の引率者について。最低一人は車の運転が出来る者を選定した方が良い。現地での移動は基本的に車移動であったが、その車を運転できるものが極少数であったため負担が集中してしまった感がある。特に東北学院大学の先生や学生は休む暇なく運転していた印象が強い。
- ・反省会・ミーティングが長くなってしまうことがあるので効率的に行きたい。
- ・東北学院大学に置かせてもらっている備品を行きと帰りの毎回バスに載せるのは非効率的である。参加人数にもよるが、余計な荷物が増えバスの荷台に載せられる荷物が減ってしまう。手袋やビブス、救急セットなど次回クルールでも使用するものは体育館に置いてもらった方が良いのでは？寝袋も必要個数だけ残し、足りなければ

東北学院大学から持ってくる流れのほうがスムーズであると考えます。持ち帰る最終クールには面倒をかけてしまうが、効率を考慮するとこの方が断然よいと感じました。

- ・事前のオリエンテーション時にもっとプロジェクト全体の概要や生活環境、唐桑地区に関する情報を知らせてもらえれば更に充実した活動内容となったと思う（自分自身で調べることも重要だが）。現地で「実はこうでした」ということが数多くあったため、先に活動したクールとの有効的な情報共有の必要性を感じました。

【参加メンバーの感想】

私が今回、気仙沼プロジェクトに参加しようと思ったのにはいくつか理由があります。1つは単純に興味からです。しかしこれは決して軽い気持ちでの興味ではありません。同じ日本で起きた未曾有の震災の実態を、同じ日本人である自分の目で確認しなければならぬと考えたからです。

もう1つには、私事ですが、母の実家が宮城県であったということが大きな要因の1つとなりました。私の親戚は宮城県仙台市・岩沼市など、揺れと津波の甚大な被害を受けた地域に住んでいます。震災直後は一切連絡も取れず、Twitter や Google などを駆使しても安否の確認が取れない状況が数週間続きました。この時覗かせた母の不安そうな顔が今でも忘れられません。結局数週間後には、親戚全員の安否を確認することができましたが、自分の無力さを思い知った瞬間でもありました。そこで、地域は違うけれど、何か自分の出来ることをしたいと思い立ち、気仙沼プロジェクトに参加しようと思ったのです。

気仙沼に到着したとき、私は思わず息を飲みました。想像をはるかに超える景色がそこには広がっていたからです。言葉が出ない…そんな状態になったのは初めてでした。

私は主に気仙沼市唐桑町鮎立地区での瓦礫撤去作業とリアスアーク美術館での作業に参加させていただきました。リアスアーク美術館での作業では、体力はあまり使いませんが、集中力が必要とされる作業が主でした。そこで一緒に働いた方たちはみなさん本当にやさしい方たちばかりで、多くのお話を聞かせてくださいました。中には身内の方を亡くされた方もいました。しかし気丈に振る舞ってくれ、私たちの体調を気遣ってくださるなど、本当は私たちが励まさなければならない立場で現地に赴いたはずなのに、逆に私たちが勇気づけられることとなりました。

私が何気なく「この半年は長かったですか？短かったですか？」という質問をしたところ、皆さん声を揃えて「長かった」とおっしゃっていました。この答えに正直驚きました。震災から半年という期間、私にはあつという間のように感じていました。しかし現地の方はあつという間だったなどとは思っていません。これは現地の方が、今回の震災を決して忘れずに生きていかなければならないという思いからの言葉だったのではないのでしょうか。

4日間という短い間でしたが、最後の別れでは学生全員が涙を流していました。それほど心と心が繋がっていた4日間でもあったのかなと、今振り返ると思います。

気仙沼プロジェクトでの1週間は、とにかく多くの人たちとの出会いがありました。全国に大切な仲間たちも増えました。そして多くのお話を伺うことのできた1週間でもありました。

現地でボランティア活動されている団体の代表の方のお話を聞かせていただく機会もあり、そこで「ボランティアとは常に、【偽善・自己満足・へえすごいね】が付きまとうものだ」というお話がありました。私は偽善・自己満足だと思われても構わないと考えています。それが誰かのために、そして自分の生きていく糧となっていくのならば、です。

今回の気仙沼プロジェクトにおいて、個人的にですが、ゆずの『Hey和』という曲をテーマソングとしていました。この曲にこんな一節があります。

【捨てない希望 守り続けてゆく 願いを込めて 今 想いは繋がる いつも君がいるから】

私はボランティアを今回限りにしたくありません。継続してやっていきたいと考えています。それはただ現地に赴くことだけがボランティアであるわけではありません。私たちの身近でできること、それもボランティアの一環だと思います。未曾有の震災から半年、捨てない希望を守り続けていくのが私たちの役目です。

気仙沼での1週間は毎日がとても濃いものとなり、ずっと忘れられないものとなりました。本当にありがとうございました。

社会学部2年 石川

今回初めてボランティアに参加して様々なことを学んだ。1日目は台風の影響で特に活動できなかった。2日目にはFIWCというボランティア団体と一緒に民家の草刈りをした。最初はどのようにして復興ボランティアに来ているのに草刈りなんだろうと疑問に思っていた。しかし、事情を聞くと瓦礫撤去に忙しく庭の手入れに手が回らないとのことだ。直接的な活動ではないが復興に関わるボランティアであるのだ。何でも復興ボランティアになるのだ。また、FIWCからボランティアをするにあたり、「あいさつ」「メリハリ」「～させて頂く、して頂く」「時間厳守」を学んだ。またこの一週間の活動を通して自分の中で一つのキーワードを見つけた。それは「つながり」という言葉だ。宿泊所に話をしに来て下さった加藤たくまさんも仰っていたが、ボランティアには偽善、自己満足、すごいねという言葉が付きまとうが加藤さんは人と人との「つながり」に価値を見出したいという言葉があった。私は、今回草刈りや漁師さんとのアンカー作り、瓦礫撤去などを行った。地元の方々や他のボランティア団体との交流、今回のプロジェクトに参加したみんな、様々な人と「つながり」を持った。私は全然ボランティアの経験も人生経験もまだまだ浅いが何となく加藤さんが言っていた「つながり」に価値を見出すという意味が分かった気がする。

全クルールの中で一番多い参加人数だったが、そんなに大変だったという印象はない。逆

に、大勢で楽しかったという印象の方が強い。全国各地から集まった人たちで一週間共同生活ただけでこんなにも仲良くなれると思わなかった。最終日にはみんなで打ち上げをしてその別れの際に私は号泣した。こんなに泣いたことはない程泣いた。それ程この活動を通して出会った人たちが素晴らしくて別れなくなかった。これも「つながり」なのかもしれない。

私たちはこの活動を通して学んだことを広めていくことがこれから出来ることであり、機会があればまたこのような活動に参加していきたい。

社会学部 2年 上野

今回の活動で感じたことは「一言に『ボランティア』と言っても、その捉え方や想いは千差万別である」ということです。普段の生活から離れ、身の回りに溢れていた便利なものから遠ざかり、何十人も人間が一か所で寝泊まりするという特殊な環境での経験。そんな中だからこそ日頃の生活から距離をとって、いつもなら気につけないようなことを考えるきっかけを与えてくれるのだと思います。現地の方の話、他のボランティア団体の方の話、他大学の学生や先生の話、そして明治学院メンバーの話聞く度に、それぞれが持つ考えや信念が伝わってきました。そして興味深い点は、それら全てが異なっているにも関わらず目指す方向性が「誰かのために」ということで一致していたことです。余計なものに囲まれていない環境だからこそ、その想いがストレートに心に響いたように感じます。

私自身、今回のプロジェクトに参加するにあたり漠然と「現地で困っている方の手助けとなるように」という目標を立てて活動に臨みました。しかし、この目標は必ずしも自分が本質的に意図していたものと一致していた訳ではありませんでした。実際に活動して関わる人たちは皆『笑顔』を僕たちに向けてくれます。自分が単純に「困っているに違いない」と思い込んでいた人たちが、そんな素振りを感じさせずに温かく迎え入れてくれました。その時、自身の当初の目標が不適當だったことを思い知ったのです。もちろん現地の人困っていない訳ではないと思います。だけど、そんなことが問題なのではなかったのではないのでしょうか。私達と関わることで少しでも得るものがある、そして少しでも元気になれる。そう思ってくれるからこそ、あのとびっきりの笑顔を見せてくれたんだ、と。そう思えた瞬間、「ああ。自分は東北のためだとか、困っている人のためだとか大きなことを言っていたが、そんな偉そうなことを期待してたんじゃない。ただ自分が何かすることで目の前の人『笑顔』になってくれるかもしれない、それが見たくて嬉しくてやって来たんだ」と気付きました。そして、それが何よりの自分のモチベーションとなりました。

実際、自分と関わった人のどれだけが『笑顔』になってくれたのか。そもそも自分の考え自体が見当違いではないのか。そんな不安が残っているのも確かです。しかし唐桑で経験した出来事や人々の出会いは胸を張って誇れることです。それだけは決して無駄ではなかったと言い切れます。今回の活動が大切な気付きを与えてくれたと思えました。

最後になりましたが、今回の第 8 クールメンバーを支え見守ってくださった全ての方々に感謝とお礼の言葉を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。この貴重な経験を活かして、次のステップへ進んで行きたいと思います。

社会学部 3 年 梅津

私は今まで自分の知っている範囲の世界で生活していれば良いと思っていた。だが、今回の活動を通して自分の知らない世界や考え方がたくさんあり、いろんな方と交流することが自分にとってプラスになるのだと思った。自分の殻に閉じこもっていないでもっといろんな人と出会い、世界を広げて行きたいと思った。

文学部 1 年 大江

やっぱり自分にできることは少ししかなくて、毎日の活動では大量の瓦礫や草や写真に囲まれてそれを実感してました。それでも今自分のやっていることを何十人、何百人の人がやったらきっと大きな進歩を生み出せるんじゃないかなとも感じました。なのでこの短期間の活動を通して私ができることは、みんなに現状を伝えて広めることだったり、自分自信が活動を続けていくことだったりするのかなと思いました。いろんな人と話をして話を聞いて、自分の考え方も広がったし逆に前向きになる部分もあって本当に貴重な体験でした。

国際学部 1 年 加藤

復興具合など、行ってみないとわからないことがたくさんあった。考えさせられることもたくさんあった。またボランティアに行きたいと思った。

社会学部 4 年 富野

○引率の先生方・・・とてもお世話になった。特に東北学院の宮本先生は、忙しい日程の中、ご自分の車でぼこぼこの道を走り、何回にも分けて学生全員を陸前高田に連れて行って下さり、とても感謝している。よく言われることだけれど、やはり写真で見ると実際に見るとではまったく違う。「道の駅 高田松原」には、貝が上の方まで打ち上げられていた。その高台から下を見下ろし、地震と津波から半年も経ったのに、住宅地にまだ海水が残っていることに驚いた。家があったところには人が住んでいたはずだ。その人たちは、どうなってしまったんだろう。そう考えても実感が持てず、なんともいえない

気持ちになった。

○早馬神社…今回のプロジェクトの学生リーダーが、夜中に早馬神社に連れて行ってくれた。早馬神社は体育館から歩いていける距離にあるが、最終日間近にしてまだ行けていない学生がいることを知り、本当は夜中に連れて行きたくないんだけど、と言いつつ連れて行ってってくれた。夜中に連れて行きたくない理由は、唐桑で夜中に人が歩き回るのは不審者であることと、震災後、夜中に瓦礫から物取りをする輩もいるからとのこと。以前うるさくしながら歩いていたら、宮司さんに怒られたこともあるそうだ。そんなトラウマがありつつも連れて行ってってくれたのは、やはりその神社や、神社に行くまでの住宅地の状態を見せたかったからだと思う。実際、真っ暗であまり見えなかったというのが本音だが、次の日意外と時間があつたため友人と歩いて見に行き、この光景を見せたかったことがよく理解できた。土台以外なくなってしまった住宅跡。震災後おそらく手をつけられていない料理店（パブ？）。それらの後ろ、少し上には被害を受けていない家。それらから目と鼻の先にある仮設住宅。この住宅地の震災前を想像したかったが、難しかった。反対に、帰京して自分の地元の駅に着いてから、家や車が普通にあるのを見て違和感を抱いたため、それが瓦礫と化したことを想像してみた。すると、とてもリアルに描くことができ、ぞっとした。想像しただけでもぞっとする風景を現実として毎日受け止めなければならぬ被災された方々のことを思うと、また行きたいと思った。

○FIWC 加藤たくまさんのお話…本当に聞けてよかった。ありがとうございました。とても一つ上の人とは思えない話の内容で、大学の講義、それもととても興味深い講義を聴いているようだった。自分の人生のストーリーを話せるようになるため、まずは自分の体験を言語化して、自分の経験として人に伝えられるようになること、そこから始めて自分の中のつながりを見つけること。ボランティアの話だけに限らず、人生に関わる話であると感じた。また、ボランティアに関する話の中であった、「ボランティアという言葉は心の距離を意味する」という言葉が印象に残っている。何かを手伝う相手が初対面の人であれば「ボランティア」、仲の良い人であれば、それはボランティアとは言わない。「偽善」や「自己満」「へえ～すごいね」という言葉がつきまとう「ボランティア」という言い方を嫌う理由がわかった。そしてそれが、FIWCのワークキャンプの意義を示していると感じた。また尊敬する人ができた。

○地元の漁師さんのお話…最終日の前日、外でプチ打ち上げしていたら現れてお話をしてくれた。私は、漁師さんは津波によって船や漁具を流されたりして大変そうだ…くらいにしか理解していなかったが、当時のお話を聞いて、想像を絶する状況であったことがわかって驚いた。家族の命の次に大事な船を守るため、瞬時に「今ここから港に向かい、津波が到達する時間までに沖出し（津波に流されないよう、船を沖に出すこと）

することができるか」を判断し、電柱や岩が倒れてくる危険の中車を走らせ港に向かう。船に乗り込み家族と別れ一人海へ出る。港の網などに船が引っかかって命取りにならないよう慎重に、でもできるだけ早く遠くへ船を動かす。自分より早く沖出しを始めた船でも、津波の被害を小さく見積もったため距離をとらず、波にのまれたものもあった。自分は、想定外のことも考えてとにかく遠くへ船を出した。…その経験から、私たちに「想定外のことを考えて」「とにかく高台へ」と強く、何度も伝えてくれた。生きろと言ってくれた。この方のお話を聞かなければ、漁師さんがこんなに大変な思いをしているということは気づけなかったと思う。夜中に、ありがとうございました。

今回、本当に行ってよかったと思います。3.11 は明らかに衝撃的だったのに、日常を送るにつれ私の中でその衝撃は薄れてきてしまっていました。しかし現地に行って実際に被災した土地を見、そこに住む人々、そこで支援を行う人々と出会い、その衝撃を再確認することができました。地元に戻ってから、この自分の住む街が瓦礫と化した場面を想像してとても怖くなりました。それを現実として毎日受け止めなければならない方々の力になれるなら、また被災地に足を運びたいと思いました。

またそこで支援を行う人々の想いに触れられたこともとても勉強になりました。FIWC の加藤さんからの「このプロジェクトの経験の後、どうするか？」という問いに、私は「避難所や仮設住宅での活動にも挑戦したい」と答えたいと思います。以前は、被災した方と密にふれあうことは、私のような人間にはできないのではないかと感じ躊躇していました。しかし今回のプロジェクトを経験したことで、不安よりもやりたいという気持ちが大きくなりました。様々な人々の様々な考え方に会い、得ることの多い六日間でした。このような経験をさせていただき、ありがとうございました。

社会学部 4年 山口

私自身は、引率として2泊3日（+夜行バス）という大変短い活動への参加でした。活動初日、台風後の雨の中、佐々木先生はじめ東北学院大学の教員、学生スタッフの皆さんがバスで気仙沼の津波被災地に我々を案内して下さったことが大変印象に残っています。またその日のミーティングで、50名以上の参加者一人ひとりにその感想を求め、被災地でボランティア活動をするだけでなく、その地域やそこで暮らす人たちの過去から現在、そして未来の生活をしっかりと見て、聞いて学んでほしいとおっしゃった佐々木先生の言葉に感銘を受けました。

東北学院大学の皆さんも、被災地で被害を受けた当事者であるにもかかわらず、広く全国の大学の学生たちに、ボランティアのプログラムをコーディネートして下さり、学生たちが体験を通して、大きな学びをする機会を提供して下さったことに、深く感謝いたします。

今回の学生たちの体験や、そこでの学生同士の出会い、彼らのネットワークから、新たな発想や活動プログラムが生まれることを楽しみにしています。またこの活動を長く継続して、これからも明学として出来ることをつないでいきたいと思っています。

社会学部教員 茨木

以上